

歴史探訪 Part II - ⑱

江戸川木材工業株式会社

顧問 清水 太郎

先日のニュースで、日本橋の上空を塞いでいる首都高速を前後1.2kmを地下に埋め、古来より五街道の起点として親しまれて来た日本橋に空を取り戻し、合わせて日本橋川の景観も整備する計画があることを知りました。奇しくも翌日、某会合で『『国土交通フォーカス2018』 インフラを中心に』のテーマで、国交省の某高官より講演がありました。あらまは、社会資本が老朽化しており、内訳は、道路橋40万(橋長2m以上)トンネル約1万本 河川管理施設(水門等)約1万 下水道管は約45kmであります。将来の維持管理、更新費を推計しますと、2013年は年間3.6兆円、2023年は(10年後)4.3~5.1兆円、2033年は(20年後)4.6~5.5兆円となります。このような高負担(予算3千億 工期20年以内)で日本橋に青空が回復できることは、我々高齢者にとっては、リニア新幹線の開通と共に大きな夢となることでありましょ。

今勉強している東洋史で、大関に昇進した栃ノ心の出身国は、新聞等ではジョージアとなっておりますが、講義で配布された、現代の中央アジア地図ではグルジアとなっております、三井物産の手帳にある世界地図の横文字表記はGEORGIAであり、教授に質問した処、ロシア訛りと欧米流との違いであることがわかりました。因みに女子フィギュアスケート金メダルのザギトワ、テニス女王のシャラポアはカタール人であります。東洋史では玄奘三蔵が歩いた道が出てまいります。広辞苑を紐解きますと、中国の長編小説『西遊記』では、孫悟空や猪八戒に助けられて三蔵が、大小81の難を凌いで天竺に入り、5048の経文を授けられる夢物語となっております。三蔵の一行はオアシス経由で王族に贈り物をして安全に通行することができたようです。アラビア半島で発祥したイスラム教は、西はアフリカ方面、東は中央アジアへと布教され、言葉や王国に大きな影響を及ぼしてゆきます。(7~10世紀)

5月28日の日本文化史では、戦国時代の修験者について学びました。紀州の熊野は都から南の隅(すみ)に位置することから隈(くま)が転じて熊野と呼ばれるようになりました。後白河法皇の参詣が転機となり熊行九十九(多いことのたとえ)と云われ、多くの人々が詣でるようになり、熊野三山(本宮、新宮、那智)を修行三山と云われました。熊野詣でに関する1、小栗判官縁起(小栗と照手姫の伝説)2、道成寺縁起(安珍と清姫の物語)等もあります。熊野が洪水等で不通になりますと、伊勢参りや高野山参りに多くの人々の足が向かうようになりました。

源平争乱をめぐる伝承と歴史の中には、平家落人伝説や、平泉と義経伝説等、興味は尽きることはありません。従来、鎌倉時代は、1192年(いひ国作った)となっておりますが、1185年(いひ箱)説、源頼朝が征夷大將軍に任命されたとき等、諸説出てまいりました。幕府は鎌倉に開かれた説や頼朝が上総で旗上げし、下総で開いたという説が、幕張という地名で裏付けられたとの説もあります。



現代の中央アジア